運動部場面と友人関係場面の「空気の読めなさ」の比較研究
―社会的スキルおよび個人・社会志向性との関連をふまえて―

‘Feel the Atmosphere’ in Sports Club Situations and Daily Relationships with Friends: In Relation to Social Skills Deficits and Individual/Social Orientations

キーワード：空気を読む、社会的スキル、運動部場面、友人関係場面

大石　千歳

問題意識

人間関係における「空気が読めない」といわれる状況とは、いったいどういうことであろうか。

大石（2009）[1]では、本学学生を対象に自由記述法による調査を行い、学生の生活場面ごとに「空気が読めない」と判断される行為を抽出した。運動部場面とアルバイト場面は、課題達成的な面が強い場面であることや、上下関係のある人間関係を含む場面であることから、比較的類似した結果が得られた。これらの場面では、部の目標を共有できないことや、仕事のペース配分の不適切さなど、集団が遂行すべき課題（運動部活動、アルバイトでの仕事）を行う上での配慮のなさや不器用さが、「空気の読めなさ」の筆頭に挙げられた。また、時と場合をわきまえないこと、自分勝手さ、目上の人や客などとの関わり方のまずさ、感情の統制ができないことも、「空気の読めなさ」の主要な要素であることが示されたが、いずれも運動部活動やアルバイトを行う上でのふるまい方の不適切さに関する内容といえた。

友人関係場面は、運動部活動やアルバイトのような明確な遂行課題がない漠然とした状況であるため、「空気の読めなさ」の筆頭に挙げられたのは、感情の統制不足であった。自分ばかりがはしゃいでいたり、反対にノリが悪かったり、いやな気持ちが顔に出てしまったりという内容である。次いで自分勝手、時と場合をわきまえない、他人に対して鈍感といった内容が抽出された。友人関係場面では、具体的な課題がないために、より曖昧な状況で刻一刻と変化する相手の感情や場の雰囲気などを、敏感に察知できなければいけないことがわかった。

また、「空気が読めない」人に対して、周りの人ができることは意外に少ないと認識されていた。空気が読めない人に対して、周りの人は迷惑に思いながらも、どうすることもできず我慢するしかなく、その結果相手を嫌いになってしまうということが明らかにされた。

本研究の目的

上記の大石（2009）の結果受け本研究では、本学学生にとって重要な場面であり、遂行課題が明確である運動部活動場面と、より一般的な友人関係場面に分けて、「空気の読めない人」とはどのような人であると認識されているのかをさらに検討する。

1. 大石（2009）の結果から「空気の読めなさ」に関する質問項目を作成し、場面想定法を用いた質問紙調査を行う。運動部活動場面と友人関係場面のそれぞれに関して、「空気の読めない人」を一人イメージしてもらい、その人物の「空気の読めなさ」を上記質問項目により測定し、両場面における「空気の読めなさ」の構成要素の比較を行う。
2. 大石（2009）では、「空気の読めなさ」の背景に社会的スキルの欠如があることが示唆されているの

で、本研究では相川・藤田（2005）[2]の成人用ソーシャルスキル自己評定尺度を用いて、運動部場面と友人関係場面の各々について、「空気の読めなさ」と社会的スキルの関連性を検討する。この尺度は、社会的スキルを構成する下位概念に対応した次の下位尺度を含んでいる。関係開始とは、初対面の人と関係を開始するためのスキル、解読は相手の表情の変化や感情を読み取るスキル、主張性は相手の意志を尊重しながら自分の意志を抑えることなく相手に伝えるスキル、感情統制は自分のネガティブな感情を表出せずにいられるスキル、維持はすでにできあがっている対人関係を維持するスキル、記号化は自分の感情を相手に上手に伝えるスキルを表している。

3. 大石（2009）では、「空気の読めなさ」の構成要素として「自分勝手」「時と場所をわきまえない」こと、すなわち周囲と協調できないことが挙げられている。そこで本研究では、伊藤（1993、1995）[34]の個人志向性・社会志向性PN尺度を用いて検討を行う。個人志向性とは、周囲に流されず自分の意見や信念を重視することであり、社会志向性とは周囲との調和を重視することである。他人に流されず自分の意志を貫くのはよいことであるが、自分勝手になってしまうのはよくない。また、周囲と協調するのはよいことであるが、人目ばかり気にして自分を見失うのはよくない。そのため伊藤（1993、1995）では、個人志向性と社会志向性をポジティブ・ネガティブな側面に分けて測定する尺度を作成したのである。

方　法

調査参加者

1. 運動部場面に関する調査：本学学生198名。大学時代に運動部に所属している人は132名であったが、高校時代に運動部に所属していた人は188名であった。本研究で思い浮かべてもらう「運動部場面」とは、仲間とともにスポーツ活動をする場面という意味で、研究の目的に照らしてクラブチーム等を思い浮かべても差し支えないため、回答者198名全員を分析対象とした。
2. 友人関係場面に関する調査：本学学生141名。回答者全員を分析対象とした。

質問紙の構成

運動部場面に関する調査

「空気の読めない人」を1人思い浮かべて、その人が以下の各質問項目にどのくらいあてはまるかを評定するという、場面想定法を用いた他者評定を行った。

1. 大石（2009）によって抽出された、運動部活動における「空気の読めなさ」に関する21項目（4件法）を実施した。
2. 自分が思い浮かべた「空気が読めない人」に対して、「あなたはどんな気持ちになりましたか」と尋ね、自由記述で回答してもらった（本稿では紙幅の関係上割愛する）。
3. 「あなたはどんな気持ちになりましたか」との問いに対して、大石（2009）の結果を踏まえて作成した「空気が読めない人」に対して生じる感情に関する11項目（4件法）を実施した。
4. その「空気が読めない人」に対して「どう接しようと思いましたか」という問いについて、大石（2009）の結果を踏まえた7項目（4件法）を実施した。
5. 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（相川・藤田、2005）を実施した。この尺度は35項目（4件法）から成り、関係開始、解読、主張性、感情統制、関係維持、および記号化の計6つの下位尺度から構成されている。
6. 個人志向性・社会志向性PN尺度（伊藤、1993, 1995）を実施した。この尺度は、他者と関わる際に個人が重視する基準としての、個人志向性と社会志向性を測定するもので、計30項目（5件法）から構成されている。本研究では、他の尺度に合わせる形で4件法で実施した。4件法で実施すると「どちらともいえない」の選択肢をなくすことができ、答えづらい設問に対してとりあえず「どちらともいえない」と回答してしまうことを避けられる利点もある。

友人関係場面に関する調査

運動部場面の調査と同様に、「空気の読めない人」を1人思い浮かべて、その人が以下の各質問項目に

どのくらいあてはまるかを評定するという、場面想定法を用いた他者評定を行った。

1. 大石（2009）によって抽出された、友人関係場面における「空気の読めなさ」に関する23項目（4件法）を実施した。

2以降は、運動部場面に関する調査と同じ内容で実施された。

結果および考察

1．「空気の読めない人」の人物像

運動部場面について

「空気が読めない人」に関する21項目の因子分析結果は以下の通りであった（表1）。

主因子法･プロマックス回転により、固有値1.0以上を基準とすると4因子が抽出された。第一因子から順に「上下関係逸脱」「自分中心」「他者配慮欠如」「場規範逸脱」と命名された。「上下関係逸脱」は、怒られたばかりなのにすぐまた怒られることをする、先生の機嫌を察することができない、先生や先輩の指導を聞いていない、先生や先輩に気を使えないなどであった。「自分中心」は、いやな気持ちが顔に出る、自分の考えを曲げず一人反対する、団体行動ができない、自分勝手な行動をする、自分の立場を分かっていないなどであった。「他者配慮欠如」は、みんなで声を出すときに出さない、大会中に試合の応援をしない、荷物運び等で楽をしようとするといった、自分だけ手を抜く内容の項目や、自分だけ弱音を吐いたりノリが悪かったりして、場の雰囲気を壊す内容の項目であった。「場規範欠如」に所属するのは、突然関係ない話を

表1　運動部場面での「空気の読めなさ」因子分析パターン行列

	上下関係逸脱	自分中心	他者配慮欠如	場規範逸脱
17. 怒られたばかりなのにすぐ怒られるようなことをする	.895	-.063	.024	.003
16. 先生の機嫌を察することができない	.759	-.382	.293	-.075
18. 先生や先輩の指導をきちんと聞いていない	.752	.185	-.025	-.111
19. 先生や先輩に気を使えない	.746	.149	.027	-.098
21. 状況の流れを読んで行動できない	.511	-.187	-.105	.441
7. いやな気持ちが顔に出てしまう	-.281	.729	.162	-.262
10. 自分の考えを曲げず一人で反対する	-.025	.652	.024	.045
8. 団体行動ができない	.174	.620	-.030	.007
11. 自分勝手な言動をする	.105	.476	.064	.241
5. 自分の立場を分かっていない	.220	.438	-.226	.231
9. みんなに迷惑をかけたのに反省しない	.215	.389	.206	.025
20. 気持ちの切り替えができない	.242	.315	-.052	.162
12. みんなで声を出そうといっているときに出さない	.190	.033	.663	-.182
15. 大会中に競技の応援をしない	.323	-.060	.617	.062
14. みんなで荷物運びなど作業をしているとき楽をしようとする	.066	.333	.480	.029
6. 真面目にやるべきときにやらない	.280	.202	.365	.031
4. 人を傷つけることを言う	-.175	.261	.329	.301
13. みんなが頑張っているときに弱音を吐く	.073	.111	.309	.275
1. みんなで盛り上がるときにノリが悪い	-.131	.065	.297	.200
2. 突然関係ない話をする	-.144	-.100	-.038	.819
3. その場で言うべきではないことを言う	-.025	-.092	.203	.735
因子間相関	上下関係逸脱	自分中心	他者配慮欠如	場規範逸脱
上下関係逸脱		.621	.614	.571
自分中心			.516	.683
他者配慮欠如				.375
場規範逸脱				

因子抽出法：主因子法　　回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

する、その場でいうべきでないことを言うという2項目であった。因子間相関につては、各因子相互に中程度の正の相関がみられたといえる。

運動部はやはり先輩と後輩、監督と選手などの上下関係を伴う人間関係を中心に成り立っている集団であり、「上下関係逸脱」が第一因子として抽出されたのは、理解しやすい結果であるといえる。また運動部における日々の活動は、集団行動によって成り立っているため、集団行動ができず自分勝手に振舞ったり、みんなが頑張っているのに自分だけ手を抜いたり、みんなのやる気をなくさせたりする行動が問題視されていたといえる。

友人関係場面について

「空気が読めない人」に関する23項目の因子分析結果は以下の通りであった（表2）。

主因子法・プロマックス回転により、固有値1.0以上を基準とすると5因子が抽出された。第一因子から順に場規範逸脱、自分中心、他者配慮欠如、雰囲気逸脱、協調性欠如であった。

因子間相関については、他者配慮欠如は雰囲気逸脱の相関が低く、自分中心との相関も低かった。それ以外は、相互に中程度の正の相関がみられた。

運動部場面とは異なり、日常的な友人関係においては、上下関係は存在しない。そのため、運動部場

表2　友人場面での「空気の読めなさ」因子分析パターン行列

	場規範逸脱	自分中心	他者配慮欠如	雰囲気逸脱	協調性欠如
5. 授業中にうるさくてじゃまになる	.784	-.211	.019	-.055	.012
4. 公共マナーが守れない	.773	-.185	.111	-.211	.117
3. 真剣な話をきちんと聞かない	.755	.024	.274	-.072	-.304
1. みんなが静かなのに自分だけうるさい	.671	-.181	.112	.172	-.200
17. 真面目にやるべきときにやらない	.585	-.016	.247	.021	.176
9. その場で言うべきではないことを言う	.485	.216	-.141	.154	-.142
20. 自分が和を乱していることに気付いていない	.394	.285	-.297	.255	.124
16. 自分の立場を分かっていない	.389	.389	.062	.095	.008
12. 人を傷つけることを言う	.384	.216	.258	-.201	.194
23. 話に割り込んでくる	-.087	.863	-.111	-.369	.105
7. 突然関係ない話をする	-.339	.725	.123	.004	-.096
8. 自分ばかりしゃべる	-.153	.538	.119	.120	-.021
13. ウケないことを何度もやる	.184	.504	.017	.003	-.088
22. 自分勝手な言動をする	.139	.319	.228	.086	.162
14. 平気で遅刻してくる	.181	-.104	.519	.000	.128
11. 笑ってはいけない状況で笑う	.110	.264	.519	.136	-.110
15. 携帯電話やメールをしていて人の話を聞いていない	.131	.044	.481	.102	.157
6. 一人だけまじめで冗談が通じない	-.340	.067	.211	.733	.056
2. みんなで盛り上がるときにノリが悪い	.132	-.312	.018	.677	.115
10. 場をしらけさせるようなことをいう	.330	.177	-.148	.425	-.026
18. いやな気持ちが顔に出てしまう	-.211	-.022	.126	-.007	.635
19. みんなでやる作業や遊びに参加しない	.058	-.115	.013	.268	.604
21. 自分の考えを曲げず一人で反対する	-.080	.281	.050	.095	.429
因子間相関	場規範逸脱	自分中心	他者配慮欠如	雰囲気逸脱	協調性欠如
場規範逸脱		.508	.219	.540	.379
自分中心			.160	.668	.402
他者配慮欠如				.036	.207
雰囲気逸脱					.340
協調性欠如					

因子抽出法：主因子法　　回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

面での結果と比較すると、友人場面における第一因子「場規範逸脱」は、運動部での「上下関係逸脱」と呼応するものといえる。運動部場面にも「場規範逸脱」因子はみられるが、属する項目は2項目しかない。運動部における「場規範」の多くは、上下関係に関連したものであるためと考えられる。

「自己中心」「他者配慮欠如」は、友人関係場面でも運動部場面と同様に、「空気の読めない」人物の言動を表す因子として抽出されている。

2．「空気の読めなさ」と社会的スキルとの関連性

運動部場面について

運動部場面における「空気の読めなさ」の各因子に関して、負荷量の高い項目の評定値を合計し、因子毎の下位尺度得点を算出した（表3）。成人用ソーシャルスキル自己評定尺度に関しては、相川・藤田（2005）による各下位尺度毎に、合計得点を算出した。空気の読めなさの各下位尺度得点と、社会的スキルの各下位尺度得点の相関係数を算出した（表4）。

「記号化」スキルは、運動部場面での4つの「空気の読めなさ」のいずれとも正の相関が有意であった。その理由として、「記号化」は表情やジェスチャーで自分の感情を表現するという内容であるため、自分の感情を遠慮なく表出するという意味で、正の相関となった可能性が考えられる。

「主張性」スキルは、「自分中心」「他者配慮欠如」「場規範逸脱」の3下位尺度得点と有意な正の相関を示した。周囲に遠慮せず、自分の言いたいことをはっきりいうという、「空気の読めない人」の自己主張の強さが、このような結果につながったといえる。

「関係維持」スキルは、「自分中心」「他者配慮欠如」「場規範逸脱」との間に有意な正の相関を示した。

表3　運動部場面および友人関係場面における各調査指標の平均値

運動部場面調査サンプル			友人関係調査サンプル		
「空気の読めなさ」	平均値	(SD)	「空気の読めなさ」	平均値	(SD)
上下関係逸脱	14.92	(4.03)	場規範逸脱	26.72	(5.74)
自己中心	20.55	(4.91)	自己中心	13.63	(2.98)
他者配慮欠如	19.02	(5.33)	他者配慮欠如	8.18	(2.12)
場規範逸脱	6.40	(1.66)	雰囲気逸脱	8.57	(2.10)
			協調性欠如	7.84	(2.16)
社会的スキル	平均値	(SD)	社会的スキル	平均値	(SD)
開始	20.16	(4.94)	開始	20.51	(4.98)
解読	16.31	(5.72)	解読	15.31	(4.02)
主張	18.07	(5.07)	主張	17.59	(3.68)
統制	7.99	(2.34)	統制	8.46	(2.29)
維持	7.91	(3.07)	維持	7.41	(2.07)
記号化	10.69	(3.21)	記号化	10.54	(2.70)
個人志向性・社会志向性	平均値	(SD)	個人志向性・社会志向性	平均値	(SD)
個人志向性ポジティブ	22.58	(3.99)	個人志向性ポジティブ	22.82	(3.39)
社会志向性ポジティブ	21.08	(6.32)	社会志向性ポジティブ	19.55	(4.00)
個人志向性ネガティブ	18.08	(5.17)	個人志向性ネガティブ	17.63	(3.72)
社会志向性ネガティブ	16.81	(6.72)	社会志向性ネガティブ	15.68	(3.95)
空気が読めない人への態度	平均値	(SD)	空気が読めない人への態度	平均値	(SD)
嫌悪・怒り	20.80	(6.15)	嫌悪・怒り	20.55	(4.74)
うらやみ	1.53	(.95)	うらやみ	1.46	(.65)
無関心	2.01	(1.01)	無関心	1.91	(.87)
哀れみ	2.88	(1.88)	哀れみ	2.42	(1.04)
回避	9.42	(3.45)	回避	10.42	(2.32)
忠告	7.40	(2.30)	忠告	6.65	(1.95)

表4　運動部場面の「空気の読めなさ」と社会的スキルの相関係数

		開始	解読	主張	統制	維持	記号化
上下関係逸脱	相関係数	.080	.029	.062	.032	.080	**.118**
	有意確率（両側）	.268	.680	.382	.652	.264	.099
自分中心	相関係数	.085	**.135**	**.145**	-.029	**.160**	**.243**
	有意確率（両側）	.236	.057	.042	.683	.024	.001
他者配慮欠如	相関係数	.075	**.182**	**.264**	-.024	**.157**	**.223**
	有意確率（両側）	.297	.010	.000	.740	.028	.002
場規範逸脱	相関係数	**.223**	.073	**.151**	**.180**	**.180**	**.310**
	有意確率（両側）	.002	.304	.034	.012	.011	0.000

また「解読」スキルも、「自分中心」および「他者配慮欠如」との間で正の相関が有意であった。これらは予測とは異なる結果である。

上記の結果は、空気の読めない人は社会的スキルに欠けているという当初の予測とは、方向性が異なっている。社会的スキルを測定する心理尺度には様々なものがあるが、全体的な傾向として、「〇〇ができる」といったように、何らかの言動をとれるかという測定をしている場合が多い。このような心理尺度に回答する際に、社会的スキルの欠如としてイメージされやすいのは、引っ込み思案で他人に声をかけることができなかったり、会話が饒舌に続けられなかったりといった、他者との交流に消極的でおとなしすぎる人物なのではないか。相川・藤田・田中（2007）[5]では、社会的スキル（ソーシャルスキル）の不足は抑うつ・孤独感・対人不安の原因でもあり、結果でもあることが示されている。

ところが本研究において運動部場面で「空気の読めない人」としてイメージされた人物像は、おとなしすぎるタイプの人物ではなく、押しが強くて図々しく、よくしゃべり、感情を表に出すタイプの人物であったと考えられる。本人は対人関係にむしろ積極的であるため、ソーシャルスキル自己評定尺度の各項目に当てはめると、積極的でスキルがある人物であるかのような結果になるのではないか。このような解釈は、「空気の読めなさ」の下位尺度ごとにみるとさらに妥当性が示唆される。例えば「上下関係逸脱」に関しては、社会的スキル各下位尺度との相関関係は明瞭ではなく、「記号化」スキルとの相関係数が有意傾向であるだけである。しかるに「場規範逸脱」は、「関係開始」スキル、「主張」スキル、「感情統制」スキル、「関係維持」スキル、および「記号化」スキルとの間に有意な正の相関がみられた。運動部場面における上下関係逸脱は、あらゆる社会的スキルの欠如として捉えられているが、場規範からの逸脱は自己主張の強さや感情表出の多さという形で捉えられている可能性がある。

本研究では場面想定法を用いた他者評定を行っているが、自己評定ではなくとも同種の問題が存在すると考えられる。本研究で想定された「空気の読めない人」とは、本人は自分の「空気の読めなさ」を自覚することなく積極的に振舞っているが、実際には周りの人間からは「ちょっとズレている人」という受け止められ方になるのではないだろうか。むしろ本人が「空気の読めなさ」を自覚できずに周囲の顰蹙を買うことこそが、「空気の読めなさ」の本質であるとも考えられる。

成人用ソーシャルスキル自己評定尺度は、本来は自分自身の社会的スキルを自己評定するための尺度であるが、本研究では場面想定法でイメージした「空気を読めない人」に関して評定をしてもらった。そのため、この尺度を用いた先行研究の結果と単純比較はできないが、本研究の結果に関しては、上記の考察が成り立つと考えられる。「空気の読めなさ」と社会的スキルの欠如の関連性を検討するには、このような「押しが強い困った人タイプ」の人の社会的スキルの適切性をより正確に測定できる尺度の開発が望まれる。

友人関係場面について

運動部場面と同様に、空気の読めなさと成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の各下位尺度得点を算出し（表3）、空気の読めなさと社会的スキルの各下位尺度得点の相関係数を算出した（表5）。

「主張」スキルが「場規範逸脱」「自己中心」「他者配慮欠如」および「協調性欠如」と有意な正の相関を示した。この結果は、運動部場面での考察と同様に、イメージされた「空気の読めない人」が大人しすぎるタイプではなく、押しが強くて図々しいタイプの人であった可能性を示している。このような人は、自己主張をすることは容易にできるが、その主張が周りの人に受け入れられていない状況にあるといえる。

「記号化」スキルに関しても、運動部場面と同様に、「他者配慮欠如」および「協調性欠如」との間に正の有意な相関を示した。自分の感情を遠慮なく表出することは、他者への配慮や協調性の欠如につながることがあるということである。

「解読」スキルが「自己中心」「協調性欠如」との間で正の相関を示しているが、運動部場面と同様に、この結果に関する解釈は難しい。

一方で、運動部場面と異なる結果がいくつかみられた。第一に、「統制」スキルが「協調性欠如」と負の有意な相関を示していることである。空気の読めない人は、自分の感情を統制することができず、他者との協調性に欠けるという結果である。第二に、友人関係場面では「関係維持」スキルは、「空気の読めなさ」のどの下位尺度得点とも有意な相関がみられなかったことである。これらの結果は、社会的スキルの定義にそったもの（相川、2009[6]などを参照）といえる。

3．「空気の読めなさ」と個人志向性・社会志向性との関連性

運動部場面について

個人志向性・社会志向性PN尺度に関して、伊藤（1993, 1995）に示された各下位尺度（個人志向性ポジティブ、社会志向性ポジティブ、個人志向性ネガティブ、社会志向性ネガティブ）毎に、合計得点を算出した（表3）。そして、これらの各指標と「空気の読めなさ」各下位尺度との相関係数を算出した（表6）。

「個人志向性ネガティブ」が、「上下関係逸脱」「自

表5　運動部場面の「空気の読めなさ」と個人志向性・社会志向性の相関係数

		個人志向性ポジティブ	社会志向性ポシティブ	個人志向性ネガティブ	社会志向性ネガティブ
上下関係逸脱	相関係数	.067	**.123**	**.166**	.050
	有意確率（両側）	.353	.085	.019	.482
自分中心	相関係数	.100	**.131**	**.235**	.026
	有意確率（両側）	.165	.066	.001	.712
他者配慮欠如	相関係数	.038	**.121**	**.235**	.066
	有意確率（両側）	.595	.090	.001	.353
場規範逸脱	相関係数	.015	**.172**	.037	.016
	有意確率（両側）	.832	.015	.604	.819

表6　友人関係場面の「空気の読めなさ」と社会的スキルの相関係数

		開始	解読	主張	統制	維持	記号化
場規範逸脱	相関係数	.085	-.017	**.176**	-.089	-.113	.118
	有意確率（両側）	.326	.848	.041	.301	.186	.169
自己中心	相関係数	.067	.018	**.178**	-.087	-.054	.074
	有意確率（両側）	.434	.833	.038	.313	.531	.386
他者配慮欠如	相関係数	.137	**.191**	**.283**	-.137	.102	**.208**
	有意確率（両側）	.109	.026	.001	.108	.229	.014
雰囲気逸脱	相関係数	-.093	.077	.038	.004	-.011	.025
	有意確率（両側）	.280	.374	.660	.961	.899	.768
協調性欠如	相関係数	-.039	**.196**	**.231**	**-.266**	.082	**.178**
	有意確率（両側）	.646	.022	.007	.002	.335	.035

分中心」「他者配慮欠如」と正の相関を示した。「個人志向性ネガティブ」は、個性が強すぎて人とぶつかる、自分中心に考えることが多い、などの項目を含む下位尺度であるため、当初の予測通りの結果が得られたといえる。

解釈が難しいのは、「社会志向性ポジティブ」が、「上下関係逸脱」「自分中心」「他者配慮欠如」「場規範逸脱」と正の相関を示したことである。社会志向性ポジティブとは、人に対しては誠実に、社会のルールに従い、といった項目である。このような結果が得られた可能性としては、社会的スキルに関する結果の部分でも述べたように、回答者が「空気の読めない人」について評定する際に、「本人はそういうつもりでいるのだろう（周りからはそうは思えないけれど）」ということが考えられる。

「社会志向性ネガティブ」は、どの「空気の読めなさ」とも有意な相関が見られなかった。社会志向性ネガティブは、引っ込み思案で他者の顔色を気にしてしまう、といった内容であるため、「空気の読めない人」にはあてはまらないと判断されたといえる。ここからも、本研究の場面想定でイメージされた「空気の読めない」人は、「押しが強くて図々しいタイプ」であったと考えられる。ちなみに、「個人志向性ポジティブ」も、どの「空気の読めなさ」との間にも有意な相関は見られなかった。

友人関係場面について

運動部場面と同様に、個人志向性・社会志向性の各下位尺度と「空気の読めなさ」各下位尺度の相関係数を算出した（表7）。

運動部場面と同様に、「個人志向性ネガティブ」と、「自己中心」「他者配慮欠如」「協調性欠如」に有意な正の相関がみられた。自分勝手な自己主張は、他への配慮の欠如や協調性の欠如につながるという結果となった。

運動部場面に関する調査とは異なり、「社会志向性ネガティブ」も、「自己中心」「他者配慮欠如」との間に有意な正の相関を示した。人目を気にしすぎたり、人に頼ったり、悲観的であったりするのは、押しが強くて図々しいのとはまた異なった一面といえるが、これらの要因もまた、他者との関わりを困難にさせるものといえる。

他には、個人志向性ポジティブは、空気の読めなさに関するいずれの下位尺度とも有意な相関を示さず、社会志向性ポジティブは、「他者配慮欠如」のみとの間に有意な正の相関を示していた。

4．「空気の読めない人」に対する態度（抱く感情・対処方法）

運動部場面について

表8にみられるように、運動部場面については、空気の読めない人に対して抱く感情、および対処方法であるすべての要因、すなわち「嫌悪･怒り」「うらやみ」「無関心」「哀れみ」「回避」「忠告」は、「空気の読めなさ」に関するすべての指標、すなわち「上下関係逸脱」「自分中心」「他者配慮欠如」「場規範逸脱」と正の相関が有意であることが示された。

表7　友人関係場面の「空気の読めなさ」と個人志向性・社会志向性の相関係数

		個人志向性ポジティブ	社会志向性ポジティブ	個人志向性ネガティブ	社会志向性ネガティブ
場規範逸脱	相関係数	-.055	.152	.105	.101
	有意確率（両側）	.562	.105	.235	.249
自己中心	相関係数	-.060	.035	**.272**	**.180**
	有意確率（両側）	.524	.712	.002	.039
他者配慮欠如	相関係数	-.020	**.197**	**.258**	**.147**
	有意確率（両側）	.834	.034	.003	.092
雰囲気逸脱	相関係数	-.034	-.038	.071	.034
	有意確率（両側）	.717	.689	.418	.698
協調性欠如	相関係数	-.069	-.015	**.201**	.137
	有意確率（両側）	.467	.877	.021	.117

運動部活動は、同じ目標を追求する課題志向的集団であることや、退部すると競技面での目標が達成できなくなるという特徴をもっている。部の中に苦手だと思った相手がいても、その人と関わらないわけにはいかない。そのため、相手に対して抱く感情は、「嫌悪・怒り」「うらやみ」「哀れみ」などのいずれにせよ、強いものになりやすいのではないだろうか。「回避」は、気持ちとしてはそうしたいが、運動部を退部するわけにもいかず、ともに活動しなければならない以上、実際問題としてなかなか回避することは難しい。「忠告」については、活動を共にしている以上、試合や練習における課題達成のためや、監督や先輩から怒られないようにするためなど、忠告せざるを得ない機会も多いのではないかと考察される。

「うらやみ」に関しては、上下関係や規則など何かと規律の厳しい運動部活動にあって、「あそこまでやりたい放題にふるまえるなら、むしろうらやましいくらいだ」という感情を持つのではないだろうか。

「哀れみ」については、そのような厳しい運動部活動にあって、周囲の人とうまくやれない人をみて、かわいそうにもなるのではないか。「無関心」との相関は有意ではあるが、他の諸指標と比較すると、相関係数はそれほど高くない。

友人関係場面について

表9にみられるように、友人関係場面での「空気の読めない人」への感情や対処行動は、両者が含むすべての要因が相互に有意な正の相関を示していた運動部場面とは、かなり異なっていた。

「嫌悪・怒り」は、「場規範逸脱」「自己中心」「他者配慮欠如」「協調性欠如」と正の相関が有意であり、運動部場面と類似した結果となった。「回避」は、「場規範逸脱」「自己中心」「協調性欠如」と有意な正の相関を示した。これも、運動部場面と類似した結果といえる。

「うらやみ」は、場規範逸脱との間に負の相関が有意であった。運動部場面ではいくつかの指標と正の相関があった「うらやみ」であるが、友人場面では異なる結果となった。「無関心」と「他者配慮欠如」との

表8　運動部場面の「空気の読めなさ」と「空気の読めない人への態度」の相関係数

		嫌悪・怒り	うらやみ	無関心	哀れみ	回避	忠告
上下関係逸脱	相関係数	**.355**	**.325**	**.193**	**.249**	**.304**	**.384**
	有意確率（両側）	0.000	0.000	.006	.000	.000	0.000
自分中心	相関係数	**.586**	**.367**	**.189**	**.254**	**.438**	**.351**
	有意確率（両側）	0.000	0.000	.008	.000	0.000	0.000
他者配慮欠如	相関係数	**.471**	**.363**	**.150**	**.207**	**.404**	**.275**
	有意確率（両側）	0.000	0.000	.035	.003	0.000	.000
場規範逸脱	相関係数	**.489**	**.283**	**.200**	**.224**	**.348**	**.295**
		0.000	.000	.005	.002	0.000	.000

表9　友人関係場面の「空気の読めなさ」と「空気の読めない人への態度」の相関係数

		嫌悪・怒り	うらやみ	無関心	哀れみ	回避	忠告
場規範逸脱	相関係数	**.229**	**-.202**	-.119	-.056	**.219**	.078
	有意確率（両側）	.007	.017	.163	.516	.010	.362
自己中心	相関係数	**.272**	-.131	-.049	.094	**.167**	.117
	有意確率（両側）	.001	.123	.567	.275	.050	.169
他者配慮欠如	相関係数	**.175**	-.047	**-.151**	-.016	.122	**.141**
	有意確率（両側）	.040	.584	.074	.853	.151	.097
雰囲気逸脱	相関係数	-.004	-.047	-.035	-.050	.068	.040
	有意確率（両側）	.964	.584	.683	.565	.428	.640
協調性欠如	相関係数	**.269**	-.058	-.124	.062	**.201**	.068
	有意確率（両側）	.001	.494	.143	.474	.018	.422

間には、有意な負の相関がみられた。他者への配慮に欠ける人に無関心ではいられないということであろう。「忠告」は、「他者配慮欠如」のみと有意な正の相関を示した。「哀れみ」は、いずれの指標とも有意な相関がみられなかった。

先述のように運動部場面では、競技上の目標を追求するためには、気が合わない人がいても退部することは難しいため、その人と何とか折り合いをつけてうまくつきあっていくしかない。しかし普段の友人関係においては、気が合わない相手とは無理して付き合う必要はない。他の友人ともっと仲良くするなどして、その「空気が読めない人」とは徐々に疎遠になっていけばよいことである。このことが、両場面における「空気の読めない人」への感情や対処の内容に違いを生じさせるものと考えられる。

総合考察

運動部場面よりも友人関係場面のほうが「空気を読みにくい」可能性がある

運動部場面の「空気の読めなさ」の内容としては、第一因子として「上下関係逸脱」が抽出された。運動部活動では、先輩後輩関係や監督と選手の関係など、上下関係を明確にすることで規律が保たれているので、上下関係を乱す言動はルール違反とみなされるといえる。運動部場面では、第四因子に負荷量が高い項目は2項目のみであり、「上下関係逸脱」「自分中心」「他者配慮欠如」）による3因子解を採用する解釈も可能である。因子数が少ないということは、運動部場面では「何に気を配ればよいか」が明確であるといえる。すなわち、目上の人を尊敬する、練習に手を抜かないなど、「空気を読むポイント」が明確であり、それらのことに気をつけていれば、比較的「空気を読みやすい」場面といえる。

一方、友人関係場面は、「空気の読めなさ」は5因子構造となり、第3～第5因子には3項目ずつが高い負荷量を示した。本研究では、大石（2009）の自由記述調査の結果から友人関係場面における「空気の読めなさ」の項目を作成しており、授業の受け方に関する項目（授業中にうるさい、など）が比較的多く含まれていた。それでもなお、友人関係場面は運動部場面と比べて課題志向的ではないため、「空気を読むポイント」は不明確であり、多くの因子に項目が比較的均等に分かれたといえる。このことは、友人関係場面では「何に気を配ればよいか」が分かりづらく、「空気が読みにくい」ことを示している。この結果は大石（2009）の指摘と一致している。

「空気を読む」のが苦手な人にとっては、運動部に代表されるような課題志向的な場面よりも、友人関係に代表されるような、目標があいまいな場面のほうが、適切な振る舞い方が分からず、失敗も多くなり、適応がより困難になる可能性があるといえる。

「空気が読めない」人としてイメージされるのは「遠慮なく自己主張するタイプ」の人

社会的スキル研究においては、社会的スキルの欠如とシャイネス・孤独感との関連性が指摘されている（相川・藤田・田中、2007など）。しかし本研究では、運動部場面、友人関係場面ともに、「空気の読めない人」としてイメージされたのは、内気な人や友人が少なく孤独なタイプの人ではなく、遠慮なく自己主張をするタイプの人であった。社会的スキルを測定する尺度では、「○○ができる」といった形で個々の社会的スキルの成否を自己評定するものが多いため、そのような人は遠慮なく人に話しかけることができ、会話を続けることもできる、といった形で「社会的スキルがある人」という評価になってしまう可能性がある。

社会的スキルは、その場その場の文脈に沿って発揮されなければ、本来意味がないはずである。授業中など、静かにすべき場面で見事な会話スキルを発揮しても、周囲からは迷惑な人であると認識されてしまう。したがって、個々の社会的スキルの成否を測定する形では、「空気の読めなさ」と社会的スキルの関連を検討するのは、困難であるといえる。

運動部場面では、「空気が読めない人」との人間関係に苦労しても、簡単に退部することはできない。退部すれば、自分がその競技を続けることができなくなり、夢の実現もかなわなくなる。そのため、「空気が読めない人」とも、いやでも関わっていかざるを得ない。ゆえに運動部場面と友人関係場面を比較する

と、「空気が読めなさ」の各側面に対する嫌悪・怒り、うらやみ、あわれみは、運動部場面のほうが明確であった。行動としての忠告や回避も、運動部場面のほうが明確であった。友人関係場面では、苦手な人と無理に一緒にいる必要はなく、徐々に疎遠にしてゆくことが可能であるためと考えられる。

今後の展開――社会における排除の問題として

ところで、何らかの苦境にある人や、何かがうまくいかない人は、その人に落ち度があると判断されて周囲の人から排除されるのであろうか。本研究では、周囲の人との人間関係の問題に焦点を当てて、周囲から浮いてしまう人について、場面ごとに検討した。本研究は、平成19~20年度科学研究費補助金（若手研究（B））「“格差社会”における“自己責任論”と社会集団内の逸脱者排除現象の関連性の検討」（課題番号19730396）の一部分として行われた。本研究は、集団からの逸脱者の排除に関する研究のうち、運動部というフォーマルな位置づけにある所属集団と、友人関係という自由でインフォーマルな所属集団からの逸脱者の排除に関する研究として行われた。

本研究と並んで現在進めている研究として、より社会構造に根ざした集団における逸脱者の排除研究がある。就職活動で失敗して内定が得られなかったある大学の卒業生に対して、後輩の立場になる調査回答者からの評価はどうであるのか、また失敗の原因をどう帰属するかについて検討している。さらに、職を得られないことや、非正規雇用の状態で働いていることは、今日の社会では自己責任と判断され、援助の手が差し伸べられないのであろうか。若年正規雇用男性、若年非正規雇用男性といった社会集団を対象としたWeb調査も実施しており、今後結果の公表をしてゆく予定である。

就職活動や雇用の問題は、本研究で扱った「空気の読めなさ」とは直接の関連はないが、小規模から大規模な集団における、あるいは社会全体における排除の問題を扱う研究として、両者は相互に関連しあっているといえる。

引用文献

1. 大石千歳　2009　「空気が読めない」とはどういうことか？：社会的スキルの欠如という観点からの検討　東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 44, 87-96.
2. 相川　充・藤田正美　2005　成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成　東京学芸大学紀要第1部門教育科学, 56, 87-93.
3. 伊藤美奈子　1993　個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討　心理学研究, 64, 115-122.
4. 伊藤美奈子　1995　個人志向性・社会志向性PN尺度の作成とその検討　心理臨床学研究, 13, 39-47.
5. 相川　充・藤田正美・田中健吾　2007　ソーシャルスキル不足と抑うつ・孤独感・対人不安の関連：脆弱性モデルの再検討　社会心理学研究, 23, 95-103。
6. 相川　充　2009　新版・人づきあいの技術：社会的スキルの心理学　サイエンス社

注

本研究は、平成19～20年度科学研究費補助金（若手研究（B））「“格差社会”における“自己責任論”と社会集団内の逸脱者排除現象の関連性の検討」（課題番号19730396）の一部分として（集団からの逸脱者の排除に関する研究として）行われた。